

鹿児島県南九州市頴娃町方言における 語幹末内破音の音韻解釈

九州大学

Scotto di Clemente Marco

要旨

- 柴田（1959）によれば、颯娃町方言の語末子音に立つ内破音は中和する（音素は/Q/）。
- 近隣方言では、助詞がついた時の形態音韻交替を考慮し、音素/Q/を立てない記述も存在する（高城2025）。
- 上記の立場の違いは、より**新しい体系**を重視するか、より**古い体系**を重視するか。
- 本発表では、世代差を細かく見ることで、その**中間段階にある体系**が示すグラデーションを描き出し、この様相を共時的にどう解釈すべきかを議論する。

目次

1. 導入
2. 穎娃町方言の実態
3. 動詞の振る舞い
4. 複合語の振る舞い
5. おわりに

1. 導入

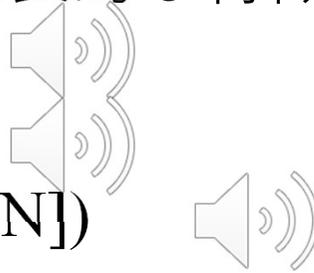
内破音

- 内破音は薩隅方言の代表的な特徴の一つ

- 「口」 = [kut̚]/[kuʔ]

- 「柿」 = [kat̚]/[kaʔ]

- 「指」 = [jut̚]/[juʔ](/[juN])



- 上村(1957)「[...]その前身は語末仮名のキ, ギ, ク, グ, チ, チ, ツ, ヅ, ビ, ブ, ルなどの狭母音[i][u]の無声化であった。この無声化が極端に進んで遂に破裂の伴わない閉鎖音となってしまったのが内破音である。」 p.17

形態音韻交替における外破

- V始まりの助詞が付くと名詞末の外破[t]が復活し、さらに別の規則により有声化・破擦化する（[Vd͡zV]）。

「口は」	(主題)	→ [kud͡za]	「柿は」	(主題)	→ [kad͡za]
「口を」	(対格)	→ [kud͡zu]	「柿を」	(対格)	→ [kad͡zu]
「口に」	(与格)	→ [kud͡zi]	「柿に」	(与格)	→ [kad͡zi]
「指は」	(主題)	→ [jud͡za]			
「指を」	(対格)	→ [jud͡zu]			
「指に」	(与格)	→ [jud͡zi]			

- 結果として、これらの**名詞末子音に立てられるのは/t/、という分析が**まず考えつく。しかし・・・

複数な形成

- 表層に現れる形成はそれらだけではない。

「柿は」 (主題) → [kad̥za]/[kagja]

「柿を」 (対格) → [kad̥zu]/[kagu]

「柿に」 (与格) → [kad̥zi]/[kagji]

「指は」 (主題) → [jud̥za]/[jubja]

「指を」 (対格) → [jud̥zu]/[jubu]

「指に」 (与格) → [jud̥zi]/[jubji]



- 右側の実現は、名詞末子音が（歴史的に古い）/k/や/b/であることを示唆する。
- つまり、上記データを元にすれば、音素が確定しない。

2. 穎娃町方言の実態

名詞と助詞付きの形態音韻交替

名詞末C
対立が中和

名詞末C
対立が確認

	基底N	単独	TOP	ACC	DAT	基底O
「時」	/tot/	[tot]	todʒa	todʒu	todʒi	
			togia		togji	/tok/
「えび」	/et/	[et]	edʒa	edʒu	edʒi	
				ebiu		/eb/

- 中和形が新しい基底となった**基底N**
- 歴史的由来を維持し、対立を保つ古い**基底O**

形態音韻交替の音素論的解釈

可能なアプローチ1 柴田（1959）穎娃町方言を対象に
 単独形のみが分析対象 例：[tot] 「時」は/toQ/

可能なアプローチ2 高城（2025）大隅半島内之浦方言を対象に
 /k/, /b/ などの歴史的基底（基底O）を採用 例：[kuʔ] 「首」は/kub/

	TOP	DAT	ACC
口 /kut/	kut=ja	kut=i	kut=u
首 /kub/	kub=ja	kub=i	kub=u
茎 /kuk/	kuk=ja	kuk=i	kuk=u
釘 /kug/	kug=ja	kug=i	kug=u

どちらのアプローチも穎娃町方言の状況を部分的にしか説明できない

個人差・世代差の存在

研究対象: 6名の話者データ（80代3名、70代1名、60代後半2名）

調査方式: エリシテーション調査

データ: 助詞付き語句（基礎語彙16項目）形態交替の観察

助詞3種類: =TOP =ACC =DAT
=a/ja =u/ju =i

NB: =NOM (=ga) などの子音始まりの助詞が逆行同化を起こすため対象外 例：「時が」→[togga]；「えびが」→[egga]等

個人差と世代差：調査結果

60代: 基底Nへほぼ完全に移行

70代: 基底Nが優勢だが、基底Oも散在

80代: 基底Oが顕著

語彙→ 話者 ↓	時	息	松 の 木	指 宿	枕 崎	先	柿	肉	え び	サ ト ウ キ ビ	あ く び	指	首	蛇	帯	足 袋
60YY	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow
60FS	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow
70AT	Green	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow
80YRf	Green	Yellow	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green
80TA	Green	Yellow	Yellow	Green	Yellow	Yellow	Yellow	Green	Yellow	Yellow	Yellow	Green	Yellow	Yellow	Yellow	Yellow
80YRm	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Green	Yellow	Yellow	Yellow	Green	Yellow	Yellow	Green	Green

颯娃町方言の実態：まとめ

- 語末単独形では、/k/, /b/などの子音が中和して[ɾ̥]（仮に/T/とする）。
- 助詞が付くと、/k/, /b/の対立が確認できるのが古い体系（基底O）
- 助詞が付いても、本来の対立が失われ/T/に置き換えが進行（基底N）
- 世代が若くなるほど基底Nに完全移行するが、中途段階の話者もいる。
- さらに、同一話者でも、語末子音の種類・付加される助詞によって基底O→Nへの移行スピードが異なる。
- 通時的変化・混成的な基底表示の存在を認める「**ハイブリッド解釈**」が最も妥当である。

基底O/Nの問題と語性 (wordhood)

- これまで見た現象は**Grammatical word + Clitic**の間で起こっていた
 - 名詞語末Cの/T/への中和は常に**GW末尾** (/toT/ 「時」, /eT/ 「えび」)
 - /T/の語中への波及は**GW+Cの境界** (/to^tya/ [todz̄a], /e^tya/ [edz̄a])
- この音韻現象は、**GW内部**で起こるだろうか？
 - 動詞のStem + Affixでどうなるだろうか？

3. 動詞の振る舞い

動詞語幹の内破

- **k**語幹動詞の連用と終止単独形の語末子音は**内破の[t̚]**として発音される。

例：動く [igot̚]

- **g**語幹動詞の連用と終止単独形の語末子音は**内破の[t̚]**もしくは[N]として発音される。

例：泳ぐ [ojot̚]/[ojoN]

- **b**語幹動詞の連用と終止単独形の語末子音は**内破の[t̚]**もしくは[N]として発音される。

例：遊ぶ [asut̚]/[asuN]

動詞語幹の内破

- **t**語幹動詞の連用と終止単独形の語末子音は**内破の[t̚]**として発音される。

例：打つ [ut̚]

- **r**語幹動詞の連用と終止単独形の語末子音は**内破の[t̚]**もしくは [i]として発音される。

例：寄る [jot̚]/[joi]

Stem + Affixの境界と基底Nの出現

- 単独形では歯茎内破音は現れても、それに類推で派生する**基底N(t->dʒ)**はその他の活用形では一切復活しない。つまり、歴史的な**基底O**が保たれている。
- 名詞で見た基底Nの波及は**GW内部では起きない**。

例：基底O

k 動かない [igog**a**N]
g 泳がなかった [ojon**ŋ**andʒatta]
b 遊べ [asub**e**]
t 打たない [ud**a**N]
r 寄らない [jor**a**N]

基底N

*[igodʒa**N**]
 *[ojodʒandʒatta]
 *[asudʒe]
 — (基底N/Oが一致)
 *[jodʒa**N**]

動詞連用語形 + Cliticの場合

- **V連用 + は + しない (か)** の構造では基底N波及は観察

例： /igoT/ 動き=は しない [igodzaseN] [igogaseN]
 /oyoT/ 泳ぎ=は しない [ojodzaseN] ・ [ojonaseN] ・
 [ojonnaseN]
 /asuT/ 遊び=は しない [asodzaseN] ・ [asobaseN]

- これらもまた名詞の世代別分布に一致しているようである
 (80代: 基底Oが顕著；70代: 基底Nが優勢だが、基底Oも散在)

やはり、基底N波及の現象はGW + Cliticの境界特有と言える

4. 複合語の振る舞い

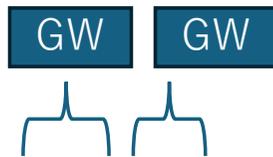
基底Nの波及を1つの手がかりに

基底Nの波及はGWとGWの境界で起こることがわかった。
 波及が語末音素から生じるとすれば、これは自然なこと。
 以下のような/T/の波及段階がある可能性：

GW末尾かつ言い切り > GW末尾 > GW内部
 igo**T** 「動く」 igot=ya 「動きは」 igok-an 「動かない」



igo**T** 「動く」



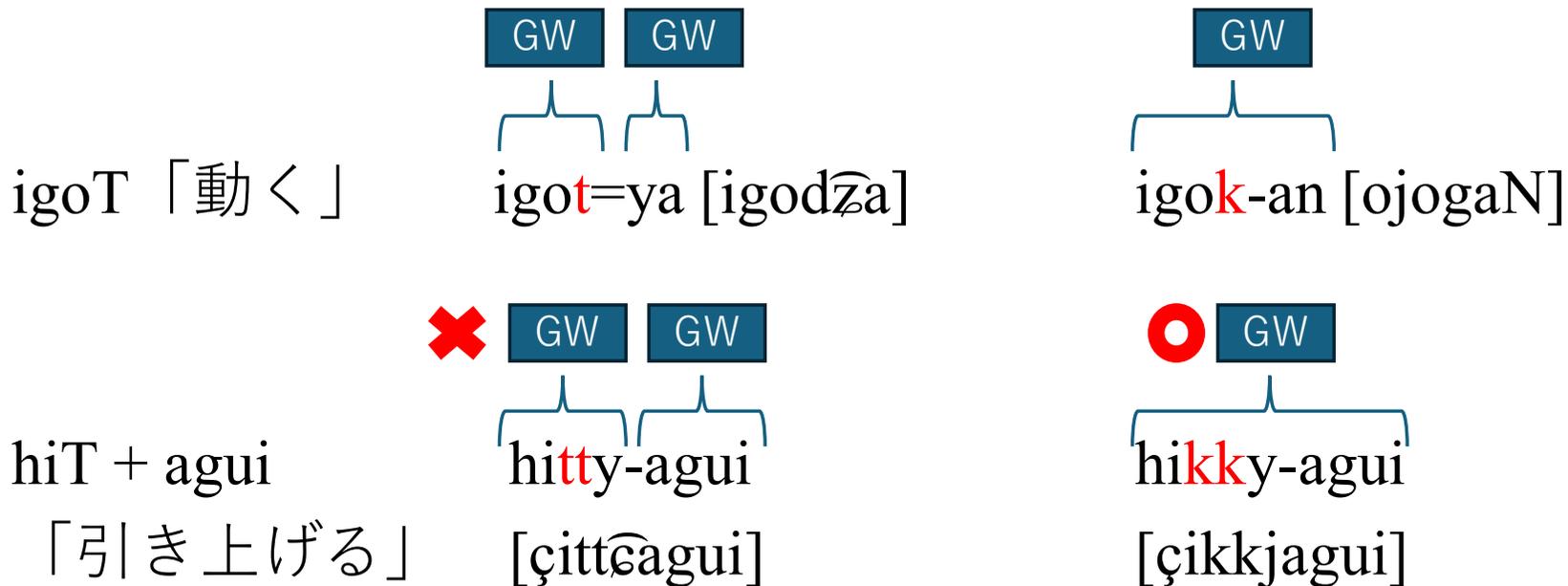
igot=ya [igodza]



igok-an [igogaN]

基底Nの波及を1つの手がかりに

複合語は、直感的には1つのGWを構成すると考えられるので、基底Nの波及は生じないと予想される。



複合における基底Nの波及

しかし、**複合語ならではの性質**として以下に注意する必要がある。

- 語根それぞれ、単独形での使用例を持つことが多い→GW+GWのような振る舞いが予想される（**基底Nの波及が観察される可能性あり**）
- 特に句との区別が問題になることがある（phrasal compound、「先祖の墓参り」などの句の包摂現象など）
- 語彙的に組み合わせが固まっているものから、新規な組み合わせまで、構成性(compositionality)がさまざま
- 複合語における基底Nの波及がどうなっているかを問うことは重要

三つの基底パターン

- 複合語内の語幹末子音は三つのパターンで現れる。
 - **基底O**
 - **基底N**
 - **声門閉鎖音**
- 世代別話者同士で一致している基底が初めて現れた。

語彙	品詞	80YR	70AT	60YY
付き合い	名詞	tikke tike	tikkyo	tukkyo
付き合う	動詞	tikkyo tukkyo tikkyota (合った)	tikkyotyor (ている) tikkyokkure (てくれ)	tukkyotyor (ている)
右足	名詞	mig.as	mig.as	mig.as
行き足	名詞	yuttyas ittyas	yuttyas	ittyas
にくや	名詞	nittyas	nittyas	nittyas
書き上げた	動詞	kattyageta	kattyageta	kattyageta
吹きあげる	動詞	futtyagui	-	futtyagui
焼きうどん	名詞	ya?udon	ya?udoN	ya?udoN
指宿行き	名詞	ibusu?ik	ibusu?yuk	ibusu?yukno
枕崎行き	名詞	makuraza?ik	makuraza?yuk	makuraza?jukno

保守的な音韻は複合語でより顕著？

- 単純語の場合に基底Oを表層に全く出さなかった60代の話者も語中でk・gを復活させることがある。
- ただし、80代と60代の話者が基底Oを利用するのに対し、70代の話者が基底Nを好んだ発話もあった。世代差ではなく個人差か？
- 話者数を増やしていけば、よりはっきりしたパターンが見えるだろう（今後の課題）

語彙	品詞	80YR	70AT	60YY
すき焼き	名詞	sukkyat/k suttyat/k	suttyat/k	sukkyat/k
引き合い	名詞	hikke	hittyoi hittyowaseta (合わせた)	hikkyo
出来上がり	名詞・動詞	dekkyagai dekkyagarta (上がった) dekiagai	degiagai degeagai	de?agarta (上がった) dekkyagai
向き合い	名詞・動詞	mukkyot	muttyowase (合わせ) muttyot muttyoi	mukot mukotyot (ている)
引き上げる	動詞	hikkyagai hikkyage	hittyagai hittyage	hikkyagai
起き上がる	動詞	okkyagai okkyagarta	ogliagai	okkyagai

声門閉鎖音型と統語的複合

• 声門閉鎖音：複合語幹末が言い切りの語末扱い

- 組み合わせが穎娃町方言話者には新規の物がほとんど。
- 複合語としてLexiconにあるというより、統語的に（post-lexicalに）組み合わせを行った結果だと考えられる。
- GWとGWの並置によるPhrasal compound的とでも言える。

語彙	品詞	80YR	70AT	60YY
書き下ろし	名詞	kaʔoros	kaʔoros	-
ナキウサギ	名詞	naʔusaʔ	naʔusan	naʔusan
柿色	名詞	katnoiro kaʔiro	katnoiro kaʔiro	kaʔiro
秋色	名詞	aʔiro	aʔiro atnoiro	aʔiro

まとめ

1つの複合語：
基底Oのみ

1つの複合語：
基底N波及あり

GW + GWでPhrasal compound：
基底N波及なし、語末 + 語頭

語彙	品詞	80YR	70AT	60YY
付き合い	名詞	tikke tike	tikkyo	tukkyo
付き合う	動詞	tikkyo tukkyo tikkyota (合った)	tikkyotyor (ている) tikkyokkure (てくれ)	tukkyotyor (ている)
右足	名詞	mig.as	mig.as	mig.as
行き足	名詞	yuttyas ittyas	yuttyas	ittyas
にくや	名詞	nittyas	nittyas	nittyas
書き上げた	動詞	kattyageta	kattyageta	kattyageta
吹きあげる	動詞	futtyagui	-	futtyagui
焼きうどん	名詞	ya?udon	ya?udoN	ya?udoN
指宿行き	名詞	ibusu?ik	ibusu?yuk	ibusu?yukno
枕崎行き	名詞	makuraza?ik	makuraza?yuk	makuraza?jukno

5. おわりに

今後の課題

- **複合語**の場合同じ語内において交替が生じる。
- 交替が**語末？語幹末？**
 - 語末の説をとれば複合語が想定外。
 - 語幹末の説をとればどうして動詞が交替しないのか。
- 語性・形態素境界の質を再検討

参考文献

- 上村孝二（1957）「南九州方言音の分布を中心に—内破音・鼻音化その他—」（鹿児島大学文理学部研究紀要「文科報告」6）17-25.
- 木部暢子（1990）「鹿児島県頴娃町方言の語中有声化について」『国語国文薩摩路』34：56(1)-45(12).
- 柴田武（1959）「鹿児島県揖宿郡頴娃町」国立国語研究所（編）（1959），315–342.
- 高城隆一（2025）「鹿児島県大隅半島内之浦方言の音韻と形態」博士論文，東京大学. 54-78; pp. 96-100.
- Bybee, Joan L. (2015). *Language Change*. Cambridge Univ. Press. pp. 75-92
- Yu, Alan C. L. “Mergers and Neutralization.” *The Blackwell Companion to Phonology*, edited by Marc van Oostendorp et al., Wiley-Blackwell, 2011. pp. 1892-1918

ご清聴ありがとうございます